

図 書 館 だ よ り

目 次

図書館を維持する力の結集を	——島崎 恒藏	1
日本女子大学叢書の紹介		
深い人間の絆—『阿部次郎をめぐる手紙』—	——青木 生子	2
『『青鞥』と世界の「新しい女」たち』	——倉田(岩淵)宏子	3
ベルリン図書館事情 —ドイツ最大級公共図書館：		
アメリカ記念図書館—	——印牧 沙織	4
上代タノ平和文庫創設40周年を迎えて	——松本 晴子	5
展示「上代タノ平和文庫創設40周年記念展」	——中曽根 緑	6
平成23年度夏期スクーリング開館について	——中澤 恵子	8



上代タノ平和文庫展示風景

図書館を維持する力の結集を

島崎 恒藏

大学図書館は、設立母体が大学であるから、必然的に大学における研究・教育に資する図書や雑誌、資料等を中心に収集することになる。しかし図書館を広く見れば、設立母体は多岐にわたっており、たとえば学校図書館のみならず、市町村などが設立する図書館から国立国会図書館まで、その規模や内容が大きく異なっている。博物館、資料館なども同様で、設立母体、設立目的などにより、実にさまざまなものが存在している。

本年3月11日に発生した東日本大震災は、歴史的建造物のみならず、図書館、博物館などにも大きな被害をもたらした。その具体的内容も、施設・設備の破壊にとどまらず、図書・資料の破損、流失などにより、休館に追い込まれた図書館等は多数に上った。この中で痛手なのは、文化的価値が高い資料・収集物が大きな被害を受けたことである。また旧家等に保存されていたような資料などを含めれば、歴史的評価を受けることなく消失してしまったものも相当数にのぼるのであろう。

わが国は、地震のみならず浸水等の災害の多い国であり、これらの備えは万全にする必要があるが、ひとたび災害が発生した場合には、資料を救済し、保全するシステムが重要となる。平成7年1月に発生した阪神・淡路大震災では、神戸市に「歴史資料ネットワーク」が誕生し、修復活動のみならず、歴史資料の掘り起こし・整理にまで活動を拡大している。また平成15年7月の宮城県北部連続地震の際に誕生した「宮城歴史資料ネットワーク」の活動なども注目され、旧仙台藩領地域の古文書等の文書をデジタル化する活動はよく知られている。3月11日の大震災で、残念ながらそれらの一部は被害を受けてしまったが、幸いにしてデジタル記録として残ったものもあるという。さらに今回の東日本大震災でも、岩手、茨城などで地域の文化資産の救出・保全を目的とするネットワークが生まれている。このような活動は、まさに図書館や博物館を側面で支える大きな力となっており、実際には大学を中心としたボランティアが大きな力を発揮している。これをさらにバックアップするにはどうしたらよいかを追求しつつ、図書館の在り方を考えることは必要だろう。

報道によれば、東日本大震災の被災地域（宮城、岩手、福島）の公立図書館は、9割近い図書館が地震によって資料や建物の被害を受けたという。もちろん上述のように、これらの図書館の形態は様々であろうが、多くの困難を抱えながらも、種々の工夫をするなどして本年8月までには、そのうちの約9割もが再開に漕ぎ着けることができたそうである。私たちにとって図書館というものの持つ意味の大きさを十分に感じさせる数字である。

(図書館長・被服学科教授)

深い人間的絆 ―青木生子・原田夏子・岩淵宏子編

『阿部次郎をめぐる手紙』(日本女子大学叢書5)の紹介―

青木 生子

「阿部次郎って……それ、なあに？」という声が聞こえてきそうである。「阿部次郎の『三太郎の日記』、これこそ青春の読書遍歴では忘れられない一冊」とひどくなつかしがる声も聞こえる。戦前、戦中を生きた私と同世代の人たちに違いない。若きドイツ哲学者、評論家の阿部次郎は大正デモクラシー、教養主義期を代表する旗手であった。今でならそれに当る文化人は誰であろうか。いないのか。

ともあれ、阿部次郎が日本女子大にこれほど深く関係したとは知らなかった、というのが異音同音の感嘆である。その資料となった書簡類(日本女子大学関係者の152通、田村俊子関係の26通)が女子大に寄託されたいきさつは、本書の冒頭に詳しい。没後残された膨大な書簡類は日記と共に「焼却すべし」と遺言されていたが、日本文化のため積極的意義をもって保存された。なかでも、生前、阿部の手で束ねてあったという当書簡には、思い入れの深さを感じさせられる。本書は遺族と日本女子大学の協力による貴重な新資料の発掘、公開に他ならない。

収録された書簡は、主に日本女子大講師就任の大正6(1917)年から同11年までの5年間であるが、東北帝大教授として仙台赴任のあとも、女子大との交流が続いている。書簡Ⅰは日本女子大に関係する麻生正蔵・茅野雅子・茅野蕭々・田村俊子・平塚らいてう・網野菊・板垣直子・湯浅芳子の八名の阿部宛書簡から成る。葉書、封書、内容、文体もさまざまであるが、それぞれに懇切丁寧な注と解説が施されている。肉筆の文字は判読に悩む点が多くあるが、パソコンの文字が溢れる現代だからこそ、じっくり読みこむうちに、すこぶる個性的、人間的な体温が伝わってくる。筆跡を添えた口絵写真が興味をそそる。

はじめに、大正6年、日本女子大二代目の校長麻生正蔵(当時学監)の、巻紙に筆で書いた阿部への講師依頼に関する書状がある。女子大創立期から講師をしていた東大の美学の大塚保治教授の口添えにより、門下生の阿部が後任を快諾したことがわかる。その背景には、平塚らいてうや『青鞥』との縁も潜んでいた。ヒューマニズムとフェミニズムを合わせもつ阿部の精神は、『青鞥』仲間の日本女子大関係者を知り、「青鞥研究会」にも講師を依頼されている。女子大とは浅からぬ縁があった。

日本女子大の文学部での「文学原理論」や「美学」の講義は大変な人気だったという。他学部の学生や卒業生も聴講し、共同教室はいっぱいになっていたそうである。

『明星』の歌人茅野雅子は、阿部の日本女子大講師時代の一時、同僚でもあった。家庭人、日本女子大教授としての生き方を垣間見させる。畏敬と親愛をこめて、さらさらと書き流した手紙43通。つづいて阿部と一高時代の同期生だった夫蕭々(儀太郎、阿部の後任講師)の、細やかな気配りの几帳面な手紙33通が収録。愛児の病死の悲しみも阿部と共にし、家族ぐるみの交流は戦争末期まで続く。

次に平塚らいてうの書簡は、阿部が女子大講師となる以前の「青鞥研究会」の頃と、その後の近況報告的な葉書が収められ、簡にして要をえた文面である。

さらに阿部の女子大での教え子で、作家となる網野菊、評論家となる板垣直子の書簡は、いずれも師との貴重な出会いのなかで、文学や生活上の重要な問題を真摯に打明け、教を乞い、人間、人生の教師たる阿部との深い絆を思わせる。

ロシア文学者の湯浅芳子は、田村俊子の墓碑建立に関する相談の手紙を送っている。その背後には、俊子が恋人の鈴木悦を追って、カナダに行く渡航費200円を、阿部が用意した関わりにより、鈴木悦の書簡の大束を感謝の意をこめて贈呈したといわれる。フェミニズム文学の先駆者とも目される田村俊子の手紙は一通のみだが、阿部に熱い信頼感を寄せている。

書簡Ⅱは大正7(1918)年5月から同年9月までの俊子に宛てた鈴木悦の膨大な未発表書簡集である。俊子研究者にとり、まさに垂涎の新資料である。新聞記者の仕事でバンクーバー行きの船に乗った瞬間から、悦は「恋しい私の俊さま」とひたすら書き続けた手紙からは、俊子のすがたもなまなましく立ち上がってくる。書簡Ⅰと異質のごとくであるが、阿部の広い人間愛の世界の中に受け入れられていたものとみたい。

(元学長・名誉教授)

「新しい女」研究会編

『『青鞥』と世界の「新しい女」たち』（日本女子大学叢書6）

倉田（岩淵）宏子

私ども「新しい女」研究会は、2002年4月から2005年3月まで、日本女子大学総合研究所の研究課題「日本と世界の「新しい女」たち—日本女子大学校と『青鞥』の時代」に参加した研究員によって構成されている。本書は、この三年間の研究プロジェクトの成果を踏まえたものであり、『青鞥』創刊100周年の本年（2011年）に奇しくも上梓できたことは、まことに僥倖であった。

本書は三部構成で、Ⅰ部「日本の「新しい女」たち」の目次は、次の通りである。

岩淵宏子	「『青鞥』と日本女子大学校—平塚らいてうと成瀬仁蔵」
渡部麻実	「『青鞥』とブルー・ストッキング」
村井早苗	「『新しい女』とキリスト教」
鬼頭七美	「リベラル・アーツとしての家政学—『青鞥』を育む場」
馬場哲雄	「日本女子大学校で学んだ「新しい女」たちと体育・スポーツ」
菅井かをる	「日本女子大学校と演劇—女優林千歳の軌跡を手がかりとして」
橋本のぞみ	「『新しい女』の平和思想—斎賀琴にみる宮田脩、成瀬仁蔵の影響」
溝部優実子	「『青鞥』草創期を支えた日本女子大学校同窓生—『家庭週報』にみる〈潜在力〉」
小林美恵子	「日本女子大学校が生んだもう一つの「新しい女」たち —小橋三四と『青鞥』内外の交流」
佐々井啓	「『新しい女』の服飾—らいてうの装いとモダンガール」

以上のように、『青鞥』に参加した女性たちの中核をなした日本女子大学校同窓生の背後にある日本女子大学校の教育や教育的磁場、すなわち創立者成瀬仁蔵の教育思想、キリスト教的側面、リベラル・アーツとしての家政学、体育・スポーツ、演劇、平和思想、さらには学寮や同窓会桜楓会の機関誌『家庭週報』など多様な切り口から、『青鞥』との関わりを論じている。また、『青鞥』とブルー・ストッキング・クラブとの差異、『青鞥』以外の「新しい女」たちの人脈の掘り起こし、「新しい女」の服装についても明らかにした。

これらの言及は、草創期の日本女子大学校の教育が、独立心にめざめた新しい女性を育成すると同時に、自由と解放を他に先駆けて実感させ、自らの天職を問いつける、規範にとらわれない女性の輩出を促したことを検証している。『青鞥』が日本女子大学校を主たる舞台として出発したこと、多くの同窓生が参加したことは偶然のなせる業ではなく、きわめて必然的な道程であったといえる。

Ⅱ部「世界の「新しい女」たち」は、19世紀から20世紀の欧米（イギリス・フランス・アメリカ）の「新しい女」誕生の経緯に視野を広げている。女性の高等教育、経済的自立、職業、服飾などからの論及は、下記の通りである。それらの問題系は、相互に密接な関連性をもって女性解放運動を実現させていった道筋を、自ずと浮き彫りにしている。

三神和子	「欧米における「新しい女」の誕生—イギリスの場合」
坂井妙子	「トリミング制作に見る、自立を目指すイギリスの女たち」
高頭麻子	「フランスに生まれた「新しい女」たち—女優サラ・ベルナールと作家コレット」
佐々井啓	「アメリカの「新しい女」たち—服装改良の視点から」

Ⅰ部とⅡ部を併せると、従来、日本と世界の「新しい女」の相関性について言及されることは少なかったが、女性の新しい仕事である女優の存在を筆頭に、高等教育の実現や職業をもつことによる経済的自立、自由な服装が女性の解放に大きな役割を果たしている点など、その動向はきわめて類似していることが明らかとなっている。これらに注目すると、世界の「新しい女」たちの動向は、日本の「新しい女」たちにリアルタイムに近い形で影響を与えたことが窺われる。

Ⅲ部には、Ⅰ部とⅡ部で取り上げている問題点が前景化されることを期して、「年表・『青鞥』と世界の「新しい女」たち」を掲載した。

現在、『青鞥』研究は海外の研究者によっても進められる時代となった。そのような状況下で本書が、研究のいっそうの進展に寄与できることを念じるものである。（日本文学科教授）

ベルリン図書館事情 ―ドイツ最大級公共図書館：アメリカ記念図書館―

印牧 沙織

冷戦時代東西を分断したベルリンの壁は今なお合計3キロメートルほど記念碑として残る。今年8月13日ベルリンの壁は構築50周年を迎えた。現地では東から西ベルリンへ逃亡を目指して命を落とした犠牲者を追憶する式典が開かれた。

アメリカ記念図書館（Amerika-Gedenkbibliothek）は、1954年、東西を分けるベルリンの壁が建築される以前の冷戦時代、アメリカ市民の寄金によって、アメリカ市民と西ベルリン市民の新しい文化交流と友好関係の発展を目的に元西ベルリンに建設された。東西の境界線上の国境検問所チェックポイント・チャーリーから僅か1,300メートルしか離れていない場所に位置し、ベルリン州内ではベルリン国立図書館（ウンター・デン・リンデン館）以来の大型図書館としてその出で立ちは東ドイツにも大きな影響を与えた。「市民教育」「レファレンスサービス」「娯楽」を重視するアメリカの公共図書館のあり方を見本とし当時ドイツでは珍しい開架式に図書が配置され、ドイツ最大級の公共図書館を名乗り、ドイツの図書館界にセンセーションをも巻き起こした。



1989/1990年東西統一を果たすと、1995年アメリカ記念図書館はベルリン市立図書館（Stadtbibliothek Berlin）、州議会図書館と合わせてベルリン中央州立図書館（ウェブサイト：<http://www.zlb.de>）として役割を担うようになる。そして中央州立図書館として「納本制度」を定め、ベルリン発の出版物及びベルリンについての出版物を当図書館に納入する義務を発行者に課した。これによりベルリンに関する出版物を地域の知的文化財産として保存し後世に継承する目的を果たす。実際ベルリンの納本制度は1699年、ベルリンがかつてブランデンブルク＝プロイセンとして統治されていた時代まで遡る。その頃納入された本はベルリン国立図書館に保管され、アメリカ記念図書館を含む中央州立図書館への納本は事実上1960年から施行されている。中央州立図書館となってもなお、アメリカ記念図書館はその名を引き継ぎ、3,400,000の蔵書を分野によってベルリン市立図書館と分けていることから総合専門図書館としての機能を持ち、音楽、芸術、舞台、メディア、哲学、社会学、文学、言語、地理を蔵書の専門分野とする。OPACはアメリカ記念図書館で独立して存在せず、全ベルリン州立図書館で一括してベルリン公共図書館ネットワーク（Verbund der Öffentlichen Bibliotheken Berlins, 略称：VÖBB, ウェブサイト：<https://www.voebb.de>）にて管理され、ベルリン中の図書館よりメディアの検索が可能である。また設立当初より館内には青少年図書館「ハレッシュェ彗星」を備え、ドイツ最大の児童図書館として教育に関する112,000メディアを収容する。読字力の推進を活動の重点におき、教育に携わる保護者、教師、教育者をサポートする。

公共図書館として「市民のための図書館」というコンセプトは館内の大きな文字で書かれたわかりやすい案内板に反映され、使いやすさが推しだされたサービスが目にとまる。建物の片面は大きな窓が占め自然な光が館内に差し込み、開放感があふれる作りで居心地もよい。図書館は一日のべ5,000人の来館者を迎え、ベルリンでも活発な文化施設の一つとして数えられる。

<利用方法>

月曜から金曜までは10時～20時、土曜は10時～19時と公共図書館にしては充分な開館時間が設けられている。併設の青少年図書館は独自の開館時間を設けているため、利用前にチェックする必要がある。図書の貸し出しは利用者としての登録が必要となるが、図書の閲覧は登録なしでも可能である。（ベルリン・フンボルト大学 学生、本学英文学科 卒業生）

上代タノ平和文庫創設40周年を迎えて

松本 晴子

第6代学長上代タノ先生は、この図書館を本学創立60周年の記念事業として建立されたが、10年後の創立70周年にはご自身の蔵書846冊を寄贈され、先生の長年の念願であった「平和文庫」を創設された。そして、その運営の全てを、5年前に既に設立された図書館友の会の北野美枝子初代常任理事に任された。2011年の今年は40周年を迎えたことになる。文庫の総冊数は7,780冊となった。私が文庫のお手伝いをするようになったのは約25年前のことで、当時は4,000冊を目指して頑張っていた記憶がある。創設当初から、この文庫がどのようにして微力ながら綿々として活動を続けて来たかを、図書館友の会の『会報』を初号より読み起こし、私的思い出も添えて辿ってみようと思う。

上代先生は『会報』No.1 (1966.10) の巻頭で「…図書館友の会の仕事は一言でいえば限りなく広汎であり、かつ、多様である。友の会会員は創意工夫をもって図書館の内容を今日無限に豊かにすることを目指して進みたい。まことに自由な楽しい協力作業として会友の心からなる参加を切望する。」と述べておられる。平和文庫はこの自由な楽しい協力作業の重要な1分野であったに違いない。『会報』No.12 (1972.5) では、当時86歳でいらした先生が、自ら本屋の店頭にしばしば立たれ、選択収集を続けておられたことや、当会副会長井出義光教授からも、平和問題に関する書籍のリストを頂いたと報告されている。上代先生は来学の折に、本の題名を走り書きした紙切れを代金ともに当時の担当土井恵美子（36回英文学科卒）に手渡しておられた。

友の会では1981年に、『日本女子大学 上代タノ平和文庫目録』を発刊しており、当時図書館の事務主任であった相馬文子氏の助言を得て、土井が完成させた。その10年後に、1991年3月31日までに収集された図書4,257冊の目録を再刊した。我が家ワープロ第1号の労作である。

『会報』No.20 (1975.6) には、小幡操氏（元朝日新聞論説委員）を選書委員会の顧問に迎え、選書に関する専門的な助言を得ていることが報じられている。時々推薦図書のリストも郵送された。上智大学国際研究室長の川田侃教授を大学まで事務局員がお訪ねしたこともあった。1982年4月に上代先生がご逝去になり、それから暫らくは友の会一切の活動が先生の追悼行事に当てられた感がある。

1986年には、既に書店から取り寄せて選別できる「見計らいシステム」を採用していたことが、『会報』No.53 (1986.7) の報告で読み取ることができる。当時、選書委員会は年8回、1988年には7回、1989年には6回設け、現在では年3回を固持している。委員会の時間は、現役の教授方のご迷惑にならぬように、12時半から1時半まで、と最初から決められ、昼食の時間にお立ち寄り頂き、本を直接手に取ってチェックして頂く、という方式であった。この見計らい方式は、初め取り扱ってくれた書店に断られた時、当時の図書館事務主任・上村美紗子氏からいろいろと助言を頂き、他社と交渉してくださり、現在に至っている。感謝するばかりである。委員会が現在のように一定の形をとるようになったのは、飯塚美子が第2代常任理事として運営を始動した約10年前からのことである。

委員諸氏は会場の図書館会議室や英文学科会議室（当時）にお出かけ下さり、積み上げられた本の山をてきばき選別された。『会報』No.62 (1989.7) でみると、委員会は顧問・福田陸太郎（共栄学園短期大学学長）、川田侃（上智大学教授）、浮田久子（日本平和学会）運営委員・青山吉信、新井明、一番ヶ瀬康子、キーン・デニス（以上本学教授）、磯野富士子（ラティモアモンゴル研究所主任研究員）、林のぶ（婦人国際平和自由連盟元副会長）、徳末愛子（図書館長）、上村美紗子（図書館事務主任）、等諸氏と北野美枝子、松本晴子（友の会）と記載されている。現在は図書館長島崎恒蔵氏、友の会副会長新井明氏、同出淵敬子氏、千葉県立衛生短期大学名誉教授白井堯子氏、事務部長中曽根緑氏、情報受入課長田口令子氏、友の会飯塚美子、松本晴子。当館4階グループ研究室Dを会議室として使わせて頂く。ご協力下さる諸委員の方々、図書館の皆様、紙面では書ききれぬご支援ご厚情のおかげで今日に及んでいる。なお、平和文庫指定のご寄付を数十年もの間続けて下さる会員もおられることを、感謝をもって付け加えたい。

（上代タノ平和文庫運営委員 図書館友の会事務局 新制2回英文学科卒業生）

一図書館（目白）玄関ホール展示一

「上代タノ平和文庫」創設40周年記念展

「上代タノ平和文庫」創設40周年を記念して、2011（平成23）年10月25日（火）～12月16日（金）まで、図書館（目白）玄関ホールにて展示を行っている。

今回の展示では、2001（平成13）年に行った30周年記念展の内容をもとに、この10年で新規に受け入れた幅広い分野の図書の一部を加え、上代タノ先生のご遺志にある「発展する文庫」の一端を紹介している。文庫は図書館（目白）5階の開架書架にあり、一部を除き、貸出もできる。

実際の書架で、ぜひ文庫の全貌にも接していただきたい。

<展示図書一覧>

書名	著編者名	出版者	出版年	請求記号
学生が語る戦争・ジェンダー・地域	福岡大学人文学部歴史学科西洋史ゼミ編著	法律文化社	2010	204-Gak
1946白洲次郎と日本国憲法	須藤孝光	新潮社	2010	913.6-Sud
Hiroshima & peace	C. Rinnert... [et al.] (eds.)	Keisuisha	2010	327.172-H66
ピース・ウーマン	A・U・ロイッター他	英治出版	2009	319.8-Reu
心をゆさぶる平和へのメッセージ	大胡田若葉他編	ゴマブックス	2009	319.8-Kok
オバマ「核なき世界」演説	『CNN English Express』編集部編	朝日出版社	2009	837.7-Oba
シェイクスピアの戦争・平和学	小田島雄志	新日本出版社	2008	932-Sha
イスラームを学ぼう	塩尻和子	秋山書店	2007	167-Shi
憲法九条と食料・農業	農業・農協問題研究所編	農業・農協問題研究所	2007	611.04-Kem
丸腰のボランティア	ベシャワール会日本人ワーカー	石風社	2006	498.02262-Mar
原発を考える50話 新版	西尾漠	岩波書店	2006	543.5-Nis
戦争と芸術	安斎育郎他	かもがわ出版	2005	704-Anz
心の国境	デボラ・オメル	日本図書センター	2005	929.73-Ome
9月のバラ	ジャネット・ウィンター	日本図書センター	2005	933-Win
世界に平和アピールを發し続けて	世界平和アピール七人委員会編著	平凡社	2002	319.8-Sek
世界平和アピール七人委員会資料集1、2	日本女子大学図書館友の会編	日本女子大学図書館友の会		319.8-Sek-1,2
戦争と女性雑誌	近代女性文化史研究会	ドメス出版	2001	051.6-Sen
地雷ではなく花をください：サニーのおねがい、続、続々 ありがとう地雷ではなく花をください：サニーのゆめ	絵・葉祥明 文・柳瀬房子	自由国民社	1996～1999	O.S.726.5-Yan
平和事典（新訂）	広島平和文化センター編	勁草書房	1991	R319.8-Hei
平和事典	広島平和文化センター編	勁草書房	1985	R319.8-Hei
広島・長崎：原子爆弾の記録	子どもたちに世界に！被爆の記録を贈る会編	子どもたちに世界に！被爆の記録を贈る会	1978	O.S.210.75-Hir
軍縮交渉史 上下	前田寿	東京大学出版会	1976	393.1-Mae-1,2
戦いの中の青春 ：1945年日本女子大卒業生の手記	日本女子大43回生文集編集委員会編	日本女子大43回生文集編集委員会	1975	916-Tat
新渡戸稲造全集 第1巻 第23巻	新渡戸稲造	教文館	1969 1987	081.8-Nit-1,23
研究社英米文学評伝叢書41 リー・ハント（研究社出版1980は複製）	上代たの	研究社 研究社出版	1936 1980	930.8-Ken-41
The history of Protestantism Vol. I～Ⅲ	Wylie, James Aitken	Cassell	1800年代	280.409-W98-1～3

<上代タノ先生関係展示>

*上代先生御影

*上代たの略年譜

(『上代たの文集』p.443～449より抜粋)

戸籍上は上代タノであるが、故人は好んで

「たの」と署名した。

*「平和文庫寄贈について」

*「上代たの平和文庫規定」

*上代先生愛用聖書

『舊新約全書』ヘンリー・ルミス譯

米國聖書會社 1904 (成瀬記念館より借用)

ミス・フィリップスからの献辞がある。明治42 (1909) 年の降誕節に受洗した教え子の上代タノに贈られた。

*『名誉都民小伝』 東京都生活文化局コミュニティ文化部 1982

*『上代たの文集：女性教育者の先達』

日本女子大学英文学科内上代たの文集編集委員会編 1984

*『上代タノ：女子高等教育・平和運動のパイオニア』 島田法子 中寫邦 杉森長子著 2010

*『上代タノ先生に学ぶ』 春殖賢人ライブラリー編 2011

*『日本女子大学上代タノ平和文庫目録』 (1991年3月31日現在)

日本女子大学図書館友の会編 1992

*日本女子大学図書館友の会『会報』No.41 付録 (1982.7) 上代たの先生追悼号

No.125 (2010.7), No.127 (2011.3), No.128 (2011.7)

*日本女子大学図書館『図書館だより』No.52 (1982.6) 上代先生追悼号



日本女子大学図書館友の会

友の会は上代タノ第6代学長によって1965年に創設され、図書購入補助、上代タノ平和文庫の継続収集、各種講座開催等の活動により図書館を支援しています。趣旨に賛同して入会(有料)された会員の方は、図書の貸出を含めて図書館を利用できます。

*入会等お問い合わせ 電話03-3941-8865
(月～金 10～15時)

(図書館事務部長・情報サービス課長兼務 中曽根緑)

平成23年度夏期スクーリング開館について

今年の夏期スクーリング開館は8月1日(月)～27日(土)の4週間で例年同様に24日間、開館時間は〈月～金〉8:45～19:00、〈土〉8:45～18:00に昨年度より延長されました。

今年の夏期スクーリングは「学園の節電についての基本方針」に基づく夏期節電対策の中で行われました。図書館もこの方針に基づき、空調は1階～4階のみ運転、5階は閉室とし、洋雑誌・上代タノ平和文庫資料は出納式(通覧希望の場合は入室をご案内)、カラー複写機利用は2階カウンター申し出制(入室をご案内)、ビデオ・DVDの視聴は1階AVコーナーB室へのご案内で対応致しました。夏期節電対策にご協力いただき、ありがとうございました。

夏期スクーリング開館の利用状況

年度	23	22	21
開館日数	24	24	24
入館者数	5,553	5,902	5,459
1日平均	232	246	228
最高	318	298	305
最低	145	184	173
受講者数	1,038	1,222	1,435
登録者数	509	543	570
1日平均	22	23	24
貸出冊数	1,606	1,812	1,895
1人当たり	4	4	4
1日平均	67	76	79
最高	111	141	145
最低	34	43	50
貸出日数	24	24	24
複写枚数	14,242	15,501	18,999
1日平均	594	646	792
一般学生・教職員 その他の貸出	1,599	1,492	1,651
1日平均	67	63	69



スクーリング登録風景

今年の利用状況は左下のとおりです。受講者数自体が減少し、図書館の利用も減少傾向にありますが、参考係利用状況は増加しています。通信教育課程では年々履修方法の選択肢が広がっており、土曜・通年スクーリング等で通常期にも図書館を利用している学生が増えてきていることが、原因の一つとして考えられます。

今年度4月の図書館システム更改により、図書館HPのOPACは多機能になり、携帯サイトからの利用も可能になりました。通信教育課程学生の方々にもより一層ご活用いただけることを願っております。(館員・閲覧係 中澤 恵子)

参考係利用状況(質問処理件数)

年度(日数)	23(24)	22(24)	21(21)
一般学生・教職員	26	30	55
スクーリング生・その他	56	40	46
合計	82	70	101
1日平均	3.4	2.9	4.8

お茶の水女子大学附属図書館と日本女子大学図書館との相互利用協定について

日本女子大学図書館は、お茶の水女子大学附属図書館と相互利用協定を締結しました(2011年11月1日施行)。日本女子大学の学生・教職員は、本学発行の学生証または教職員証を呈示することにより、お茶の水女子大学附属図書館を利用することができます。詳細は、図書館ホームページをご覧ください。

編集後記 今号作成中の10月21日(金)、お茶の水女子大学附属図書館との相互利用協定調印式が行われた。次号に記事を掲載予定である。日本女子大学叢書は本学の総合研究所設立10周年を記念して2005年度より刊行助成を開始、今号では青木元学長に叢書紹介において二度目の筆を執っていただき、倉田教授にもご寄稿いただいた。上代タノ平和文庫は年度にもよるが例年約100冊を新収、今後とも活用へつながらざる広報に努めたい。平成23年度図書館だより編集委員：中曽根緑、大沼真美、中澤恵子、鈴木学 (中曽根)